



パキスタン大洪水の救援現場の最前線から

やぎ さわ かつ まさ
八木 沢 克 昌

社団法人 シャンティ国際ボランティア会「SVA」アジア地域ディレクター

2010年、7月下旬からパキスタンの大河インダス川の北西部を襲った記録的な大雨は、国土の5分の1を呑み込む大洪水となった。死者、1,900人。洪水によって壊れた家、190万戸。被災者は、最終的に2,000万人に達した。国連の歴史始まって以来、最大の自然災害となった。パキスタンの国土は、日本の約2倍。人口は日本よりやや多い1億5千万人。

こうした中で、私たちも日本の国際NGOとしてパキスタン大洪水の緊急救援を検討した。しかし、あまりに被害が甚大で、洪水による初期の救命の段階はヘリコプター等の輸送手段が必要となり断念した。私たちは、被害の甚大だった北西辺境州での被災者の復興のための緊急援助を開始することにした。

私はバンコクに駐在しているために被災地に地理的に近いことによりその初動の担当となった。海外の緊急救援は、情報の収集と同時にまずはその被災国の被災地に入るためのビザの取得が必要。パキスタンのビザは、バンコクでは結果的に取得出来なかった。援助団体に紛れて外国からのテロリットが紛れ込むことを恐れたためだ。NGOビザを東京で取得して9月中旬に東京からの同僚と現地入りした。そして、9月、11月、12月と2週間ずつ三度に渡ってパキスタンに駐在した。

最初は、北西辺境州に近い首都イスラマバードのゲストハウスに仮の事務所を開設。これまでの自然災害による緊急援助と著しく異なったのは、治安対策。反政府のイスラム過激派、パキスタン・タリバン等から外国の援助団体に対しても誘拐やテロ活動を行うと宣告されていたことだ。日本の自衛隊もパキスタン政府からは当初、被害の

大きかった北部地域に派遣を求められたが、武器の携行が出来ないために安全確保を最優先し比較的安全とされた中部のムルタンを拠点とし、パキスタン軍の護衛に守られての物資の輸送を中心とし緊急援助だった。また、イスラム教という宗教的な制約も大きかった。

私たちの拠点とした首都、イスラマバートも外国人に対する誘拐や政府、宗教施設等に対する自爆テロ等の危険が常にあった。私たち外国人の行動は、極度に限定された。街や村を一人で歩くことは出来ない。移動は基本的に車。首都イスラマバートの中心地の全域に検問所がある程の厳戒体制。特に、対象地域が決定して実際に北西辺境州の被災地に入る際は、治安、安全対策に可能な限りの万全の方法を取った。地元のスタッフ、アシスタントも全て信頼の出来る団体と人から以外は採用しなかった。最終的には、SVAは北西辺境州の被災地域を対象に、気温が下がる冬の11月から2月に被災者が無事に冬を越せるように、防寒用品（寝具類）、台所用品、崩壊した家屋の修復及び仮設住居建設用の資器材、被災者の中でも社会的弱者の高齢者、障害者、母子家庭の自立のためのミシンや山羊等の家畜の支援を3,000世帯に提供した。

私たちの緊急援助の中心地の一つ首都、イスラマバードから北西にハイウェイを車で2時間の北西辺境州のノウシャラ郡のチェオキドール村の被災地の村に入るには、幹線道路から外れて村に近づくと警護のライフル銃を持った警察の車が前後に一台ずつ付いた。また、私たちの車も地元の古ぼけた小型の車に乗り換えた。私たちの前を走る警察官は、銃を構えて周囲を厳しい視線で見つめ



ている。一見、長閑に見えるパキスタンの田園風景。しかし道の両側には、洪水の被災者のテント村が延々と続いている。まるで難民キャンプのようだ。洪水の傷跡がまだ生々しく残っていた。村に到着すると真っ先に警察官が降りて周囲に走る。周囲が塀で囲まれた緊急物資の配布所には、金属探知機を持った初老のスタッフがチェックにあっている。

チェオキドール村の850世帯の内、150世帯が洪水で家屋が全壊。洪水から半年が経ってもテント暮らし。北西辺境州は、冬の12月に入ると朝晩の気温は、10度前後まで下がる。防寒用品と調理器具は、被災した全世帯に配布した。家屋が全壊した120世帯には、冬の寒さから身を守るための仮設住宅の建設資材を提供した。洪水で農地を完全に失い、作物の収穫が不可能となった450世帯にはWFP（世界食糧機構）が食糧援助を続けていた。村の社会的弱者の家庭には、70世帯に家畜の山羊を、また、80世帯には現金収入を得ることできるようにとミシンの支援を行った。

村の代表の長老は「遠い日本の人々の援助は本当に嬉しい。私たちは一人ではない。これで冬が越せる。まさかの時の友が真の友。この恩は一生忘れない」と謝辞を述べてくれた。緊急援助の物資の配布は、一步間違うと対象の村人はもちろん、他の村からも援助を求める人が殺到して大混乱になることもある。また、村人に紛れた反政府のテロリストが入り込む可能性や私たち外国人援助関係者が誘拐される危険性と隣り合わせ。

パキスタンの大洪水の災害に対する緊急援助は被災者に対する迅速且つ効果的な援助と「援助する側の安全第一」が真っ先に求められた。たった

1回の事故も許されない。地元のパキスタン人のスタッフの完璧なまでの治安対策と準備と心遣いには、本当に頭が下がった。危険なのは、私たち外国人だけではない地元のスタッフや村人も同様。

私たち日本人にとっては、遠い国、パキスタン。日本で報道されることと言えば、「イスラーム・テロリストで話題になる国」というイメージしか持たない人も多い。しかし、災害で出会ったパキスタンの人々は、驚く程にひとなつこく、温かく親日的だった。私たちが日本人だと分かると大抵は大歓迎された。アメリカに原爆を落とされ、戦後の奇跡の復興。車、電化製品、カメラ等「日本製品は世界一」と称賛。そして、「日本はアジアの誇り」だと続く。

パキスタンでの大洪水の緊急救援の現場での経験を通して、パキスタン政府の被災者への対応の遅れや支援物資が被災者に届かないことから国民の不満は募り、反政府勢力が拡大するという悪循環が起きていることを見聞きした。国として核を保有し、富裕層を抱えながらも国際社会の援助に依存する政府の対応にも首をかしげることが多かった。貧富の格差は想像を超えた。パキスタンに限らず、政府がしっかりと国民の利益、国民のことを考えて政治を行っていないと本当に悲劇だと痛感する毎日だった。最初は天災。しかし、その後は、人災。可哀そうなのは、被災者である国民。

バンコクに戻り夜一人で歩ける「平和」の有難さをつくづく感じた。そして、海外に駐在していると日本がいかに平和であるか痛感させられた。